
水産研究のフロントから

第139回アメリカ水産学会参加記

この度、日本水産学会国際交流委員会の委員としてアメリカ合衆国テネシー州ナッシュビルで開催された第139回アメリカ水産学会に参加してきました。本大会は2009年の8月30日から9月3日までの5日間の日程で、開催されました。筆者は8月31日にナッシュビルに到着し、4日間滞在しました。ナッシュビルはアメリカでは音楽の都として知られており、ダウンタウンには数多くのライブハウスが連立し、夕方頃より非常に賑やかな町となります。また、1997年よりアメリカンフットボールのテネシータイタンズのホームタウンとなり、筆者の滞在中にプレシーズンマッチが行われていました。

今回の大会の特徴は、発表要旨を予め大会のホームページで公開している点です。その為、大会当日には要旨の配布はなく、プログラムのみの配布でした。以前は、CD-Rom等の電子媒体での配布でしたが、さらに進んだ形となりました。大会参加者は興味のある演題の要旨を事前に内容を知ることができます。この為、大会当日にノートパソコンで要旨を見ている参加者はほとんど見られませんでした。日本では、特許の関係でこのような要旨の事前公開はできないだろうと思われま

す。本大会の研究発表数はポスターも含めて、凡そ950題であり15会場に分かれて講演がなされました。いつも資源保護、保全に関する演題が中心であり、養殖や食品に関するものはあまりありませんでした。今回、目新しいと思ったのはアジアから移入されたコイ類のミシシッピ川水系での影響です。これについては、日本を出発する直前に朝日新聞に掲載されていたので、興味を持っておりましたが、アメリカ水産学会で取り上げられているとは思っていませんでした。また、水産教育に関するセッションがあり、日本水産学会にはないので、水産教育推進の為に是非とも、作って頂きたいと思いました。

8月31日から研究発表が始まり、日本からは水研センター北海道区水産研究所の山村氏、同東北水産研究所の成松氏および東京大学の堀氏が発表していました。他に参加している方がいらっしゃったら、すいません。また、この日の夜には展示会場でSocial eventがあったのですが、筆者は時差ぼけのため出席できませんでした。

9月1日午後にはBusiness meetingと呼ばれる総会が開催され、外国からの招待者の紹介があり、イギリス諸島水産学会のF. A. Huntingford会長ならびに日本水

産学会から筆者がそれぞれ挨拶をしました。事業報告、収支決算の報告が最初になされ、次に新旧会長の交代の儀式がありました。今までのBill Franzin (マニトバ大学) 会長から、Don Jackson (ミシシッピ州立大学) に新会長が受け継がれました。その後、数々の学会賞の表彰が行われました。そして、来年のピッツバーグ大会の紹介がなされました。

Business meetingで、特筆すべきことは学生、特に大学院生の優れた研究に対する表彰が非常に多いことです。表彰を設けることにより、大学院生の研究に対するモチベーションを上げ、さらにはアメリカ水産学会への囲い込みをしているのではないかと考えられました。日本水産学会もこの辺は参考にするとよいのではないかと考えられます。

また、同日夕方には国際交流委員会が開かれ、メキシコ、ブラジル、ロシア、オーストラリアおよび日本などからの参加者を交えた各学会の状況について、意見交換を行いました。

9月2日の午後には、世界水産学協議会(WCFS)の非公式な会議がありました。この会議には、アメリカ、イギリス諸島、オーストラリア、メキシコ、ブラジルおよび日本の各国水産学会ならびに国際チョウザメ学会から参加がありました。ここで、筆者は昨年10月に横浜で開催された第5回世界水産学会議の概況を説明しました。特に世界的な経済の不況状態にあるため、資金集めに苦労し、日本水産学会から多額の資金を提供した旨、報告をしました。また、今回は2012年にイギリスのエジンバラで開催される予定ですが、具体的なテーマについてはまだ決定していないとのことです。しかしながら、準備は着々と進行しているとのことでした。

この日の夜には、いわゆる交歓会がナッシュビルの郊外にあるSmiley Hollowという牧場で開催され、カントリーミュージックやロックの演奏があり、カーボーイ風とでも言うような料理がたくさん振舞われました。

最終日の9月3日には、一般講演の終了後の夜に大会会場にもなっているホテルでFarewell Socialが行われ、閉会となりました。

来年は上述しましたように、9月12日から16日までペンシルベニア州のピッツバーグで開催されます。要旨のメ切りは来年の2月5日になっていますので、日本水産学会からも奮って参加して頂きたいと思えます。詳しくはアメリカ水産学会のホームページを参照して下さい。以上のように、短い滞在ではありましたが、日本水産学会とアメリカ水産学会との交流のために多少なりとも役立てたのではないかと考えられます。

(海洋大 佐藤秀一)